チームビルディングとグループワークをリンクさせた授業設計

筒井　洋一*1
Email: ytsutsui@gmail.com

*1：京都精華大学人文学部

◎Key Words チームビルディング，グループワーク，授業デザイン

1.　はじめに

よりよい授業というのは、学習者と教授者の主体的参加を促すものであると言われるが、それを授業目標との観点から考えると次のようにいい代えることができる。すなわち、大学の授業デザインとは、学習者と教授者との主体的参加の中で、学習者が授業目標を設定し、その目標達成に向けての学習活動を継続することである。教授者は、その支援者として学習者の授業目標達成を支援することにある、ということである。

発表者は、教授法の工夫という漸進的な改善ではなく、学習コミュニティーの位置づけ、自己発展的なカリキュラム、見学者による授業評価、教授者の転換などのイノベーションをおこなった。

発表者の狙いとしては、授業に関わるステークホルダーを拡大し、役割の位置づけを転換させる中で、学習者自身が授業をきっかけとして、学びへの関わりを根本的に転換することにある。学習者が多くのステークホルダーに囲まれながら、チームとしての一体感を醸成していき、自律的な学びへのきっかけとなる授業を実現したいと考えている。

これらトータルなイノベーションをおこなうにあたってのコンセプトおよびその結果について、本年前期の学部自由選択授業「グループワーク概論」を事例にして論じていく。

･2.　授業イノベーションの諸相

･2.1　授業協力者の登場

近年、アクティブラーニングの最先端のコンセプトとして学習コミュニティー(Learning Community: LC)という概念が使われる(1)。その核心は科目連携にあり、その連携の意図は共通して，「共同体感覚を養うこと」と「学習者と教員間の教育目的の共有化」である。本発表は、科目間連携ではないが、チームやクラスとしての共同体感覚を養い、学習者と教員間の教育目的の共有化を目的としている。

通常、授業というのは、教授者と学習者で構成される。両者には最終的には権力関係がありつつも、可能な限りフラットな関係での授業運営が求められている。教授者がファシリテーターとしての役割を求められているのである。

当該授業では、開講前に Facebook などで「大学の授業を一緒に創りませんか」という呼びかけをおこない、三名の授業協力者(Creative Team :CT)が集まった。大学院生、他大学生四年生、まちづくり代表とそれぞれの活動を持ちながらも、ボランティアで半年間教授者と一緒に関わった。彼らは、何年間もワークショップやまちづくりに関わっているその分野での経験者である。

CT は、授業日には、午後から夜中まで、授業準備や授業運営に携わったが、教授者と学習者との間をつなぐ存在となった。学習者にとっては、教授者と異なるより学習者に近い存在として感じられ、授業に対する親近感が一気に強まった。

また、教授者は、授業全体のプロデュースをおこないつつも、CT との連携をおこなった。これは、授業のステークホルダーを拡大するだけでなく、教授者と学習者との関係を転換させるものとなった。教授者が授業を一旦手放して、CT に委ねることで、より俯瞰的な視点から授業を捉えることが可能となった。FD 義務化の中で、教員の授業マネジメント力向上が求められているが、この授業では、それとは逆に、ボランティアで関わった CT を前面に出して、教員がいかに授業を手放すのかという視点を提起した。

･2.2　チームビルディングとグループワーク

当該授業でも同様の傾向であるが、この授業の取得理由を尋ねると多くの場合、「単位取得のため」と答える。学習者は、必ずしも当該授業に強い関心を寄せているわけではなく、単位取得だけを目標にしていることも多い。そのような学生にこそ授業に出席してもらい、何らかの気づきが得られる授業にしたい。

学習者をなんらかの強制感で出席させるのではなく、自由意思で出席させることはできないのだろうか。教員が強制力を行使して、学習者に学ばせるのではなく、学習者同士で学びたくなる状況を作り出し、結果として出席者数を増やすことはできないのだろうか。

学習者を個人ではなく、チームの中の一員であるという授業運営とチームビルディングを重視したグループワークを駆使した。その結果、チーム内で孤立する個人や欠席がちの学生が減少してきたのである。

チーム内で互いに深く知りあい、認め合う関係が深まるにつれて、学習者はチームに帰属することに愛着を持ち、チームとしての一体感が高まっていく。これによって、欠席するよりも、出席する方が楽しいという気持ちが学習者に醸成されるのである。

2.3　自律的に学ぶカリキュラム

当該授業では、１５週で３つの小プロジェクトを経

て最終的にプロジェクトを完成させるというシラバスを実施している。１小プロジェクトを４週パッケージとして、４週目にはプロジェクトの振り返りを入れて、現状の確認と今後の方向性について学習者自身が振り返ることとした。

当該授業では、「グループワークの手法を学びながら、円滑なコミュニケーションの仕方を学ぶ」ことがテーマであるため、テーマ１では、自分の過去から自分の強みを発見し、テーマ 2 では、現在、相手と気持ちが通じ合いたいと思いながら、通じ合いたい人との関係を改善することであり、テーマ３は、社会で生きている人に失敗を乗り越える工夫を尋ねて、それを自分のバイブルにするというものであった。テーマ１～３を通じて、学習者が授業外においてよりコミュニケーションができることを目標にしている。

テーマ毎にメンバーを代えているが、１チーム６名を基本にしている。チーム内では、個人ワーク、ペアワーク、チームワークなどメンバー相互が互いのことを知りあうためのワークをおこない、メンバーの抱えている課題や強みを聞く中で、一体感が醸成される。

こうしてチーム活動が楽しくなると共に、授業に関わり始める学習者が生まれてきた。授業終了後には、後述する見学者や CT と一緒に本日の授業の振り返りをおこなうが、３名から最高９名の学習者が１時間ほど残って感想を言い合うこととなった。第８週時点で既に受講生の半数が振り返りに残っている。

さらに、授業前後には、CT と一緒に授業支援をしたり、翌週の授業を創る手助けも始めている。このように、学習者が、授業を受ける存在→授業を支援する存在→授業を創る存在へと成長している。

2.4　見学者による学生の授業評価の実施

よりよい授業は、学習者と教授者の主体的参加を促すものであるが、その評価方法としては、大学が実施するアンケート形式の学生の授業評価が一般的である。もちろん、その意義は認めるとしても、すべての授業で実施するために、学習者はほとんど機械的に回答していることが多い。そのため、必ずしも有益な回答となっていない場合がある。

また、実施時期が途中であっても、最後であっても、教授者に評価結果が戻される時には授業終了後であったり、最終盤であるために結果を踏まえた授業ができないという問題もある。

そこで、学習者がより具体的な提案を出し、翌週にフィードバックが可能となり、また、教授者の影響を受けない形で実施する方法として、当該授業では、見学者による学生の授業評価を実施している。当該授業には、毎週３，４名の学外の見学者が来て頂いている。最高１２名の見学者に来て頂いたこともある。いずれの見学者も教育、カウンセリング、ファシリテーションの専門家であり、振り返り手法に精通されている方も多い。そこで、テーマ１～３のそれぞれの最終週に、毎回、異なる見学者が中心になって、振り返りをしていただいた。その時間帯には、教授者と CT は退席して、彼らの影響が及ばない形で実施した。実施時間は約 60 分間である。学生からのフィードバックについて発表時に示すが総じてコメントが具体的で建設的なものが多い。

このように見学者を単なる授業の外部者として扱うのではなく、むしろ学習者の学びの同伴者として、またファシリテーターとして協力してもらうことで、教授者と学習者との間を埋めることができたのである。

2.5　教授者の役割の転換

授業のステークホルダーは、教授者と学習者と考えられているが、発表者はむしろそこに多くのステークホルダーを重層的に関与させることで新しい授業が生まれると考えている。

教授者が学習者をどのようにマネージメントするのか、ファシリテートするのかが今の流れであり、そのためには教員の教育力の向上が必要だと言われている。もちろん、教員の教育力を向上させることは大切であるが、それよりも、教員がより俯瞰的に授業を見ることが重要だと思う。

CT を教員と学生との間に関与させたことは、予想以上に大きな効果があった。CT を単なる授業補佐として扱うのではなく、授業を創る存在として育成していくことで、教員自身の能力向上をはかることができる。俯瞰する視点を養うことで、新しい授業観が生まれてきた。

3.　おわりに

授業を創るのが教授者だけである、という通念から脱すると、他のステークホルダーの関与が可能となり、そこから新しい役割が生まれてくる。CT は、授業支援者ではなく、授業協力者として、教員と同じ立場で授業を創ると同時に、教員と学生との間をつなぐ役割を担うこととなった。

授業を公開するということから、見学者に授業を評価してもらうというアイデアが生まれた。いずれにしても、固定イメージの授業感から脱したときにすべて新しい発想が沸いてくる。

その結果、学習者自身も授業の受け手から、授業支援者を経て、授業創造者へと展開していくのである。

また、授業内での取り組みを授業外や学外へと広げていくことで、授業内で学習したことが、授業後に社会の中で応用することにつながっていくのである。

チームの力を活かして、すべてをオープンにすれば、学習者の学ぶ意欲は高まる。当該授業の試みは、単に例外的なケースではなく、他にも適用可能な要素を豊富に含んでいるのである。

(1)加藤 善子、「ラーニング・コミュニティ・教育改善・ファカルティ・ディヴェロップメント」『大学教育研究』第16号,1–16(2007).